弁護士バイロン

つかこうへい

弁護士バイロン

つかこうへい

弁護士バイロン　つかこうへい

発行者／角川春樹　印刷所／東洋印刷　製本所／宮田製本
発行所／角川書店
東京都千代田区富士見２―13
〒102　振替東京3-195208
ＴＥＬ　東京265―7111（大代表）
昭和52年６月20日　初版発行

Printed in Japan　落丁・乱丁本はお取替えいたします

0093-872184-0946(0)

目次

第一章　予感……五
第二章　膳立……一五
第三章　登場……八八
第四章　出発……一八九
あとがき　二〇〇

装幀・さし絵　和田　誠

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

弁護士バイロン

第一章　予感

検事重宗貴一郎が過労の末の心筋梗塞で他界したのは、三億円強奪事件の時効が成立した半年後のことであった。その日は、空はぬけるように晴れあがり、青山葬儀所をとりまく青葉が目にしみた。もと華族の出だという老妻は、故人が生前書き残した辞表を前に必死に唇を噛みしめていた。めっきり白くなった髪にも、陰になり日向になり、法の番人として勤めてきた夫とともに歩んだ永年の苦労がしのばれる。そして、こんな時にも喪服にシワ一つ寄せず正座している一途なけなげさが、参列者の涙を誘った。

式次第こそ殉職としてとり行なわれたが、実はつめ腹を切らされたも同然であったといってもよい。確かに、内外からの、特に警察側からの重宗貴一郎の不手際に対する突きあげは尋常ではなかった。しかし焼香を終えた検察庁公判部番外課、亀有清十郎は、帰る道すがら、同じ検事とはいえ、これほど盛大な葬儀を出してもらえる重宗を妬ましく思っていた。

今、この時でも、杉田ススムは恥かし気もなく生きながらえている。時効までの七年間、杉田は検察庁のいわゆる重宗道場にいた。動機、証拠、証人とすべて兼ね備えた、ゆるぎなき容疑者

として検察庁に送られてきた杉田を、重宗貴一郎をはじめとする担当の七人の検事は、ついに犯人として世に送り出すことはおろか、裁判に持ち込むことさえできなかったのである。

警察の仕事が「ただの人」を容疑者に仕立てあげることだとすれば、検事たちの仕事は警察から送検されてきた「ただの容疑者」に、罪と罰を与え、そして犯人としての華々しい市民権を与えることにあるといえるだろう。

検察庁の苦悩は一つには、マスコミに拡大された三億円強奪事件犯人としての神秘性と、完全犯罪をやり遂げたカッコよさを持ち、そして、延べ七十万人の容疑者と三千人の捜査陣と、予算額ほぼ五億円の捜査組織に見合うだけの犯人を造成しなければならなかったという点にあった。その期待度は、犯人のモンタージュ写真が、昭和四十四年に初めて作られてから、版を重ねるごとにりりしくなり、時効寸前には映画スターほどの魅力的な顔立ちに修正されていることにおいても明らかである。(無論、モンタージュ写真はその世相を反映し、時代の要求に答え、時にはニヒルに、時には憂いを秘めたりするものである)

国民の中にも、われわれの内なる三億円強奪事件の犯人像、というものが果てしなくエスカレートしてゆき、容疑者杉田ススムがいくら整形手術を受けようが、手記の書き方を練習しようが、りりしい犯人を期待する大衆の要求に応じきれなかったのも無理はない。しかるに杉田ススムは、単なる出来心で冗談半分にやったら、なんとなく三億円強奪に成功したというまことに無責任な動機しかなく、いかに検事側が掘り下げようと、彼の深層心理からは、怨念(おんねん)、原体験という犯罪

者に必要不可欠のおどろおどろしさが頭をもたげてくる徴候さえなく、入口をはいったらすぐ出口に至るというような性格で、「人間だから怨みつらみの一つぐらいあるにちがいない」とたかをくくっていた検事たちの誰もが杉田のあまりといえばあまりの過去のなさに、呆れ返ってしまったのである。

さらに杉田は、手のつけように困るほど特徴のない顔で、整形外科医もどうメスを入れてもストーリーのある顔を創れそうにないと、匙を投げた始末であった。

例えば戦時中なら三、四人殺してもおいそれと死刑にしてもらえなかったように、犯罪はその時代の社会にどう受け入れられるかをもって、罪と罰が決定されるものである。

杉田ススムはまじめな犯人になろうとしていた。国民のための期待される犯人になろうと一生懸命であった。後ろ指をさされることのない三億円強奪事件犯人としての捕まえられ方、手錠のかけられ方、フラッシュの浴び方、インタビューの受け方等、日夜レッスンに励み、その修業の苦しさのあまり何度か自殺を試みたほどであった。彼は、事件が発覚して厳しい追及をどうにものがれられないものと考えて、自殺をしようとしたのではないのである。大向こうをうならせるだけの犯人になり変わることができなかったためである。

新聞、雑誌、テレビ等は、心のないミーハー族に迎合し口裏を合わせてか、勝手にあなた好みの犯人像を提出してくる。今日は「特攻隊の生き残りが国を憂えての犯行か」と快挙のように賛辞するかと思うと、明日は「あの金は暴力団の縄張り争いに利用されているのではないか」とモ

ンタージュ写真に黒眼鏡をかけさせ、頬に切り傷まで入れさせる尻軽さである。その世論に押されて、検察庁首脳部内ですら三億円強奪事件の犯人像に、確固とした見解を表明する者はいなかったのである。

そのような朝令暮改される犯人像に安易に動かされることなく、重宗貴一郎は茶絶ち塩絶ち、家族と別居してまで身を諫め、杉田ススムの容疑者から犯人への育成に取り組んだ。

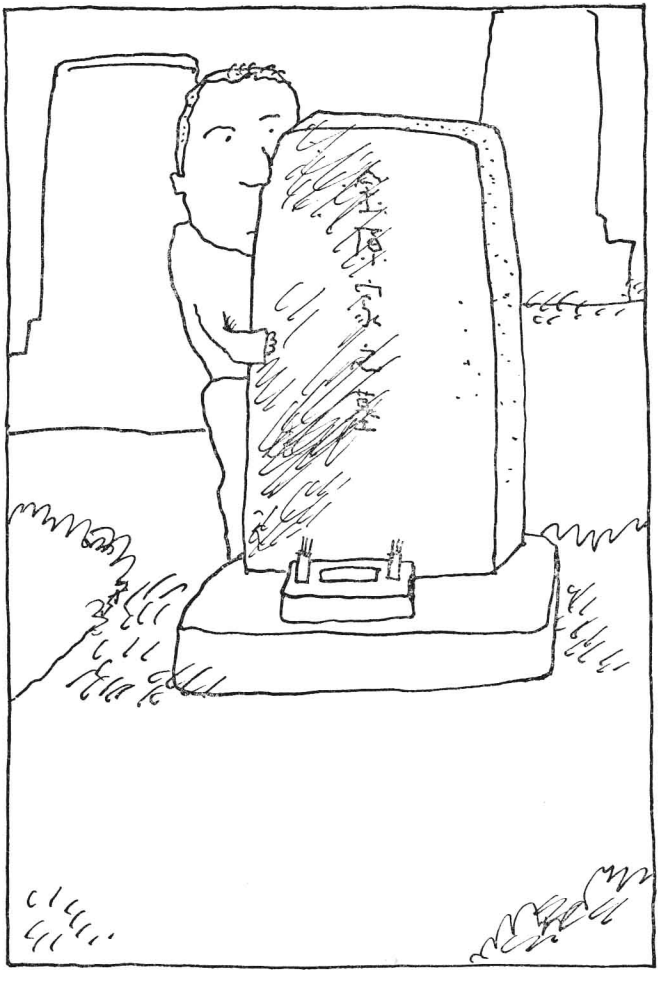
杉田の取調べの一進一退は、新聞記者をはじめ全国民から、手に汗して見守られていた。が、現場からわずか三百メートルしか離れていない林の中で泡を吹いて腰を抜かし、札束の山を指さしながら、警官にすがりついた彼が、重大事件の犯人として成熟していく可能性が皆無であることは、口には出さずとも誰の目にも明白だった。

ともすればひるみがちな杉田を重宗検事は叱咤激励し、ともに泣き、ともに笑った七年間だった。杉田を釈放し、早急に代役の容疑者をたてるように、という意見も、杉田の心の中に生まれつつある犯人としての自覚と、杉田のような底辺の人間にこそ三億円事件犯人としての栄誉を担わせてやりたい、という重宗の主張にほだされ、検察庁内部も彼に一任という形で静観してきた。

しかし、検察陣は五十一年六月十五日の、裁判官代表、弁護士代表、それに一般市民も加えた最終面接と模擬裁判で、杉田を三億円事件犯人として認知できないとの断を下した。杉田ススムは不名誉にも、容疑者ではあっても犯人たりえないと決定されたわけである。

――ゼニの取れる犯人ではない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.



——あまりに芸がなさすぎる。これじゃ裁判に持ち込めない。
——こんな犯人じゃ弁護するにも燃えない。
——万引きした奴だって、こんな奴よりもっと切実な面魂をしている。
——この程度じゃ七年もの間、真犯人を待ちに待った国民感情を押さえられない。
——傍聴席の野次に耐えられそうにない。
——記事にならない。ドキュメント映画を撮れない。ワイドショーを一時間ももたせられない。

容疑者を犯人として育てることもできず、裁判さえ開くこともできない検察側は、迷宮入りとほっかむりし、警察側にさしもどした。正真正銘の犯人を送検していながらも、時効の汚名を着せられた警視庁の怒りは、重宗以下七人全員の検事に総辞職を求めるほどだった。

亀有清十郎は、時折検察庁内で見かける上品な顔立ちの重宗が好きだった。黒々とつやのいい髪をきちんと七三に分け、物腰も静かな重宗は、

「裁判は創造だ。警察から送られてきた粗削りの容疑者を、五つの子供にも憎むことができ、七十のお婆さんにも納得できる死刑囚にすることだよ……法廷こそ創造の宝庫だ」

と、亀有のような番外課のハンパな検事にもやさしく声をかけ、気さくに肩を叩いてくれた。

四角四面の六法全書の中では到底測りきれない殺人を犯した容疑者がいったい何人、重宗の努力で見事、憎むべき殺人犯として、死刑台へのパスポートを与えてもらってきたことか。他のどの検事が、有罪判決を勝ち得、容疑者と手に手を取って「勝った勝った」と涙することができたの

か。

が、誰に恥ることもない完璧な犯人として世に送り出しても、「人を殺したぐらいで死刑を求刑するんだとよ。検事さんたちも世間を知らなさすぎる」と、堅物呼ばわりしかされない検事の宿命というものを、亀有は哀しく想った。

時効が成立した日、無罪放免という犯罪者としてはあるまじき屈辱を押しつけられ釈放された杉田ススムは、泣き叫び、いつまでも拘置所の門を叩いていたという。

先程、青山墓地の木洩れ日の中でうずくまるようにしていたのは杉田ではなかったのか。

亀有は、青山通りでタクシーに乗り込み、喪服のネクタイをゆるめながらいまや遅しと裁判を待ちのぞみ、死刑台へ自信満々のやる気をみせている〈熱海殺人事件〉の被疑者、大山金太郎の情熱を思いうかべ、うとましくなった。苦労して前衛的な死刑囚像を創ることなど億劫でしかなかった。

警視庁の名物刑事、木村伝兵衛から送られてきた事件報告書には、

『凶器・腰ヒモ――その凶器を用いた理由・そばにあったから』

と、実にあっけらかんと書かれてあった。

伝兵衛はいつもなら七言絶句調で韻を踏んでまで報告書を作成する凝り性の刑事である。ただのコソ泥をあたかも強盗のように修飾をつけ加えた流麗な文章で描くのだが……。

警視庁に問い合わせてみると、木村伝兵衛は電話口でテレ笑いをするだけであった。

どういうことだろう。あの時の伝兵衛の煮えきらなさには、決して犯人や死体をより好みして取り調べたことのない亀有ですら、いぶかしく思わずにはいられなかった。並の人間だったら腰ヒモなんかで人間を殺せるはずがない。人を殺そうとしてたまたまそばにあった腰ヒモを摑んだとしても、それで首を絞めようとした時、なんとなく違和感を感じるはずである。そして、一瞬でも冷静になっていたとしたら、腰ヒモごときで人を殺してしまう重大さに気づくだろうし、そうでなくても自然、殺意が鈍って然るべきなのだ。ジャックナイフだとか出刃包丁だとか、その気になればすぐ手に入るはずである。

——と、考えていくうち、これはもしかしたら久しぶりに素朴で無骨な容疑者にお目にかかれるかもしれないなと、内心期待に胸がはずむのを覚えていたのだが……。

ところが亀有の前に現われたのは、想像した朴訥派とはおよそかけ離れた、いかにも現代的でハイカラな男だった。彼の粋なスタイルや垢ぬけした物腰は検事たちの反感を買った。彼は育てがいのない鼻持ちならない犯人となっていたのである。たかが小娘一人殺しただけなのに。

たとえ、人を殺したからといって、それだけで死刑になれるわけではない。自分の犯罪が何故に死刑に値するのかを考え、裁判で検事との協力で有罪を勝ち取り、裁判官につつしんで死刑を宣告してもらうのである。確かに殺人という常人には到底手の届かぬことを成し遂げ、殺人容疑者という雲の上の存在になってはいるが、彼には何よりも、自分の犯したことがらが社会に与え

る影響について謙虚に取り組もうという姿勢が見えなかった。

例えば、平和な家庭の一家団らんの時、母親が子供に、

「やはり罪を犯す人はどこかおかしい」

「あんな人間にだけはなっちゃだめだよ。だから学校の先生のいうことをよくきくのよ」と、眉をひそめ、さとし、あげくは、どさくさにまぎれ、

「プラモデルなんかほしがっちゃいけないのよ」と説得でき、子供も母親の形相に口をへの字にしてなるほどと頷ける極道者としての成長を彼は望んではいなかった。彼はカッコよく死刑になることで、未踏の境地を歩んだ優越感を満足させることしか頭にないようにみえた。

……たかが俗な熱海で工員が腰ひもで女工を殺したというだけなのに……。

死体発見者、山田太郎が一介の消防団員であることに不満を洩らし、名のある人を発見者にたてろだの、せっかく落ち目の観光地、熱海市を選んで詩的ともいえる殺人を遂行したにもかかわらず目撃者がいないなんて言語道断であり、熱海市を名誉毀損で訴えると喚いたり、金太郎の増長の仕方はとどまるところを知らなかった。

大山金太郎の弁護士には誰もなり手がなく、やむなく国選弁護人として二階堂君彦が指名されたという。

二階堂君彦、彼は、ある時は七五〇のオートバイで裁判所の壁を破って現われ、ある時は大凧にのって空中から現われ、九分九厘有罪の判決を覆すことを生きがいとし、華麗な逆転劇にこそ

裁判の醍醐味を覚えるという。

そしてまた、小脇にバイロンの詩集を抱え、詩集を朗々と読みあげて自らの美学に沿って弁護するという。事件の難解度、容疑者の容姿、人間性をみてからでなくては弁護を引き受けないという粋者が、このおかどちがいの事件になにゆえ登場してくるのか。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.